

宇津保物語

下

昭和三年八月十日印刷
昭和三年八月十三日發行

有朋堂文庫
宇津保物語下卷
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷兼
發行者

三浦捷一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

宇津保物語 下 目錄

藏 開 (上)	一
藏 開 (中)	二一
藏 開 (下)	一七五
國 讓 (上)	二五一
國 讓 (中)	三三五
國 讓 (下)	四四五
樓の上 (上)	五九三
樓の上 (下)	六七九

目
錄

一

宇津保物語

藏開(上)

● 仲忠、三條京極の舊宅を修理す。寶藏の奇特。仲忠、二條大宮の院を賜はる。

(語話)

(一) 仲忠

(三) 檢非違使の別當になれば華麗な服装をする譯にゆかぬとてそれは兼ねずの意歟、但「田鶴村鳥」には檢非違使をかねたる事見えたり

(考異)

(二) 衛門督—左衛門督

梗

概

● 仲忠、三條京極の舊宅を修理す。寶藏の奇特。仲忠、二條大宮の院を賜はる。● 女一宮懷胎。仁壽殿女御退出。産屋の準備。● 女一宮、大宮を産む。仲忠母子琴を弾く。産湯。● 産養。● 女一宮に消息。七夜。盛宴。● 贈物を方々に頒つ。兼雅夫婦の物語。● 九日の産養。方々よりの贈物。管絃。● 産屋の事によりて集りし人々退散。贈物。産屋の物を帝に奉る。内侍のすけ、仲忠夫婦の前にて當代の男女を評す。● 正頼參内、産養の有様を奏す。● 祐澄、あて宮を訪ふ。産養の噂。● 祐澄父母に對面。仲忠の追薦。● 大宮五十日の産養。彈正宮、大宮と物語。● 仲忠兼右大將に任せらる。● 船の物語。● 正頼大將を辭す。● 仲忠兼右大將に任せらる。● 内、女官等の評判。俊隆の家集を進覽すべき勅を受く。● 仲忠東宮に参る。東宮、あて宮と仲忠の噂。● 近衛府の屬僚の祝宴。

藤中納言は、衛門督なれど、装束清らにせずとて、非違の別當はかけず、さてあり經給ふほどに、少かりし世のことなれど、京極など覺えければ、昔より親の傳

〔語釋〕

(一)この邸内のものとも見えず

(三)銅線なるべし

(四)俊隆

(五)伊が家は

〔考異〕

(二)うち寄りて「て」ナ

(六)一枚の書も見えず！一枚もふみ見えず

はり住み給ひける所にこそありけれ、わが親の御時に無くなりたるを、我つくらせて、母北の方に奉らむ、と思して、霜月ばかりに、睦まじき人すこし御供にておはして見給へば、この程は野中のやうにて、人の家も見えず。さる所に、昔の寢殿一つ、めぐりはあらはにて、塗籠のかぎり見ゆ。又西北の隅に大きにいかめしき藏あり。中納言、御前したる人の馬に乗りて、めぐりて見給へば、この藏は、この地の程にも見えず。供なる人に、「この地の内か。見よ」と宣ふ。めぐりて見て、供人「此の内なり」と申す。近く寄りて見給へば、藏のめぐりに、人の屍數知らずあり。恐ろしと見つと、なほうち寄りて見給へば、世になくいかめしき錠かけたり。その錠の上をば、かねを捻りかけて封したり。その封の結び目に、故治部卿の主の御名、文字彫りつけたり。中納言見給ひて、驚きて、これは文庫ならむ、昔累代の博士の家なりけるを、一枚の書も見えず、その道ならぬ琴などだに、世の中にも散り、此處にも残りたるものを、これ開けさせむ、と思すほど

〔語釋〕

〔四〕役蔭をいふ

〔六〕俊蔭が娘に琴を教へし時の事

〔考異〕

〔一〕ほとりーほど

〔二〕斯くは「は」ナシ

〔三〕御隨身の「の」ナシ

〔五〕え待ちつけーえ待ち得

〔七〕病なくなりー「病」ナシ

〔八〕ものもーものは

に、河原（一）のほとりより、年九十ばかりにて、雪を戴きたるやうなる嫗翁（二）、這ひに
這ひ來て、老人「まづ此處去らせ給へく」と泣く。「何ぞ斯くは申す」とて御隨身
の問へば、老人「なほまづ此處去らせ給へ。多くの人取り殺しつる藏なり。まづ御
覽ぜよ、こよらの人の屍を。去らせ給ひなむ時、ある様は申さむ」と言へば、怪
しがりて、うち去りて立ち給ひたり。さて、これらが申すやう、老人「此の村は、い
みじく榮えて侍りし所なり。今年二十年あまり、三十年にはまだ足らぬ程になむ、
斯く滅びて侍る。その故は、昔、一人子を唐土にわたし給へりし人の、御殿にな
むありし。その子をえ待ちつけ給はで亡せ給ひて後に、その子歸りいましたりし。
さてこの殿を、いと清らに造りて、住み給ひし程に、御女一人なむもち給へりし。
その女の小さいますがかりし時より、世に聞えぬ音聲樂の聲なむ絶えざりし。その
音聲樂を聴く人は、みな肝心榮えて、病あるものは病なくなり、老いたるものも
若くなりしかば、京の中の人（六）は、めぐりて承りし。その女、嫁時（七）になり給ひし
（八）

〔語釋〕

(七)此邊に人の住まぬ様になりしは如何なる故ぞ

〔考異〕

(一)世にありとも―ナシ

(二)見え侍りて―見え侍らて

(三)所に百歳に―所になむ百歳に

(四)百歳―百年

(五)姿顔―姿の

(六)悲しきに―悲しさに

かば、御門を閉して、人通はさでありしに、天皇親王、宮殿ばらの、御よばひの御使は、明けたてば立ちめぐりてあれど、言もえ告げでぞ侍りし。然ありし程に母かくれ給ひ、其の後父かくれ給ひにしかば、かの御女は世にありとも聞え給はずなりにき。然りしかば、この殿は、河原人里人入りみだりて、毀ちはてて、一二年に斯くなり侍りにき。屋どもは萬の者ども取りしが、事も無かめりしに、この藏ばかりは「物ども侍らむ」とてまかり寄る者はやがて倒れて、多くの人死に侍りぬ。夜は、人にも見え侍りて、馬に乗りて來つと、弓弦打をしつと、夜めぐりする様になむ侍る。かく恐ろしき所に、百歳になり侍るまでこの姫翁の見奉り侍るに、わが國に見え給はぬ姿顔おはする、玉の男の見え給へるは、いみじう悲しきに、疾く告げ申さむとて、惑ひまうで來つれど、えまうで來あへず、惑ひ侍るなり」と申す。

中納言、仲思いとよく申したり。このめぐりに住まらずなりにけむは、いかである

(七)



〔語釋〕

(一)「まつりごと」は「まがごと」の誤歟

(二)前の如く開けんと試みる者あるかと

(四)屍體

(八)仲忠

〔考異〕

(三)如する―如くする

(五)四五日―四日五日

(六)ありて―あれば

(七)被し―し」ナン

ぞ」と問はせ給へば、老人「この藏を開けむく」とし侍りつゝ、「人のあしくするを、我はなど開けざらむ」と、かつ倒れ伏せるを見つゝ、年月を経し侍りし程に、みな死に侍りにき。然せし人の家には、時のまつりごとおこりつゝ、にはかにほろび給ひにき」と申せば、仲忠「いと恐ろしきことかな。又開くる人やあると見侍れ」とて御衣一襲ぬぎ給ひて、一つづつ賜ひつ。仲忠「この地のうちに見ゆる屋のわたりに侍りて、この藏へ、また然の如するやあると見侍れ。さてその藏のめぐりにうたてあるもの、野邊に拂ひ棄てさせてさふらへ」とてかへり給ひぬれば、^(四)嫗翁、老の世に、見知らぬ、芳しくうるはしき綾、かいねりの御衣どもを得て、怖惑ふこと限なし。すなはち、物詣したる人見付けて、價も限らず買ひ取りつ。かくて其の價のものを、己が孫のあたりの者にくれて、藏のめぐりを拂ひ淨めさせてさふらへば、^(五)四五日ばかりありて殿の家司來て、^(六)幄うつ。暫しあれば、大徳たち、^(七)陰陽師など來て、^(八)祓し讀經するほどに、中納言、御前いと多くて、藏あけ

〔語釋〕

(一)陰陽師などに祭文を
よましむる也

(二)仲忠が幄舎の内に宿
する也

(六)「あぜ」は「あぜぐら」
の「あぜ」歟

〔考異〕

(三)先祖—先代

(四)開くべき—わるべき

(五)と見む—ナシ

さすべき人などひき率ておはして、事(二)の由申させ、御誦經をせさせ給ひて、鍵な
ければ、開くべきばかりをしつと、藏(三)を開けさせ給ふに、更に開かず。其處に、
二三日多くの人をひき率て、夜は車にて幄(三)のうちに居給ひつと、開けさせ給ふ
に、更に開くべうもあらず。片手を脱き折りなど、多くの人し煩ふ。

三日といふ晝つかた、御装束などし給ひて、心のうちに申し給ふやう、仲忠「承
れば、この藏先祖(三)の御領なりけり。御封を見れば、御名あり。この世に、仲忠を
はなちては、御後なし。母侍れど、これ女なり。この藏、先祖の御靈開かせ給へ」

と禱り給ふ。されど開かず。人の申す様、「天下に如何にいふとも、この錠は開く
べきにもあらず。壁を毀ちて開け侍らむ」と申せば、仲忠「如何なれば得開けぬぞ」

と見む。怪しきわざかな」とうち笑ひて、藏にのほりて見給へば、いといかめし
き錠なり。引きくつろがして見給へば、開きぬ。これは、ゆに先祖の御靈の我を
待ち給ふなりけり、と思して、人を召して開けさせて見給へば、内に今一重あぜ

〔語釋〕

(四) 俊薩女

(七) 俊薩

〔考異〕

(一) 机どもに―机にふさ
に

(二) 積み―つゝみ

(三) 残しむき―さしむき

(五) 御文―「御」ナシ

(六) 子うむ―たらむ

して錠あり。その戸には、「文殿」と印さしたり。然ればよと思して、また錠開け給へば、たゞ開きに開きぬ。見給へば、書どもうるはしき帙簞どもに包みて、唐組の紐して結び、机どもに積みてあり。その中に、沈の長櫃の辛櫃十ばかり重ね置きたり。奥の方に、よき程の柱ばかりにて赤く圓きもの、積み置きたり。たゞ口もとに、目錄を書きたる書を取り給ひて、ありつる様に錠さして、多くの殿の人残しおきて歸り給ひぬ。

(三)

三條におはして、北の方に、ありつるやう申し給ひて、この御文の目錄を見給へば、

(四)

いといみじくあり難き寶物多かり。書どもは更にも言はず、唐土にだに、人の見知らざりける、みな書きわたしたり。醫師書、陰陽師書、人相する書、孕み子うむ人のことと言ひたる、いとかしこくて多かり。母北の方、俊薩女「あなゆよしや。昔人は、

(五)

ことさら己をば惑はさむとこそ思しけれ」中納言、仲忠「いと賢くものし給ひける

(六)

人なりければ、思す様こそありけめ。これらを其處に持ち給ひてば、如何にかはせ

〔語釋〕

(二)「たい」は「對」なるべし

(四)仲忠の妻

(七)天皇が御讓位後の御住居として定められたる御殿

(八)後院にとて造れる寢をいふ

(二〇)俊蔭

〔考異〕

(一)さるべきに―さしつべき

(三)一ツ―ナシ

(五)なむ―ナシ

(六)要ある―用ある

(九)この家―この家は

させ給はまし。今までは在りなましやは」など宣ひて、すなはち國々の受領など

のさるべきにたい一つづつ預け、しつべき人々にみな宣ひ預けつゝつくらせ給ふ。

まづ築土、二三百人の夫どもして、その年のうちに築きつ。藏の辛櫃一つに香あ

りといへるを、取り出でさせ給ひて、母北の方にも一の宮にも奉り給へば、この

御族の香どもは、世の常ならずなむ。書どもも、要あるは取り出でて見給ふ。こ

の殿造れば、そのめぐりに、「かく世にさかえ給ふ君住み給ひし」とて、皆家造り

て來りぬ。かの出で來りし嫗翁は、政所に召して、布、衣などいと多く賜ふ。

畫詞

こゝは京極殿。藏あけたる所。

かゝる事を、内裏きこしめして、後院にとて年頃造らせ給ふ、大宮の大路よりは

東、二條大路よりは北に、ひろく面白き院あり、それを中納言召して賜ふとて宣

ふ、朱雀「この家、かく廣き所なるを、まだ私の家なども無かなり。これを文所

にして、かの始祖の、ことに隠されたらむ手など習はれむに、よかんべかなる。

〔語譯〕

(一) 女一宮

(四) 女一宮に與へむ

(八) 産經の記せる所に隨ひて

(九) 女一の傍を離れず

●女一宮懷胎。仁壽殿女御退出。産所の準備。

〔考異〕

(二) 人近く「人」ナシ

(三) あへなむ―あいなし

(五) 今―ナシ

(六) 然りぬべき―さるべき

(七) 思はして―おぼして

かの御子(二)ともろともに、琴(三)など弾きつゝきかせ給へ。人近く聞かざらむはあへなむ」とて賜ふ。(三)「その南(四)にこれよりは小き所あり。それは一の御子に、今(五)ものせむ」と宣ひて賜へば、中納言(六)舞踏して賜はり給ひて、まかで給ひぬ。帝女御の君に聞え給ふ、朱雀「今、女御子たちは、然りぬべき所(七)つくらせて、相次ぎつゝものせむ」なと聞え給ふ。(八)

かくてかへる年の正月ばかりより、一の宮(九)孕み給ひぬ。中納言、かの藏なる、産經などいふ書ども取り出でて、トひ給ひて、女御子にてもこそあれと思ほして、産るゝ子、かたちよく、心よくなるといへるものをば参り、然らぬものも、それに隨ひてし給ふ。参り物は、刀俎(一〇)をさへ御前にて、手づからといふばかりにて、我なほ添ひ賄ひて参り給ふ。かくてその年は、立ち去りもし給はず、かつは文どもを見つゝ、夜晝學問をし給ふ。(一一)かよる程に、子うみ給ふべき期近くなりぬれば、女御の君、上に聞え給ふ、仁壽殿「一

〔語譯〕

(二)産婦をば

(三)仲忠

(四)女一宮

(五)仲忠と

(七)朱雀の第二女

(九)仁壽殿の生家なる正頼の家は

(一〇)あやかるべき人として其方も萬更でもあらまじ

〔考異〕

(一)侍りなむ―侍らむ

(六)長く―ナシ

(八)上―君

の宮、御子産み給ふべきほど近くなりぬるを、まかで侍りなむ」上、朱雀「何時ばかりにか」女御の君、仁壽殿「十月ばかりの程になむ」上、朱雀「然るべき事にこそあなれ。さる人をば、かねてより勞りなどこそすれ。如何ならむ」女御、仁壽殿「何かは。かの朝臣、まかり歩きもせで、この頃は侍るなるを、誰もくよに疎には」上、朱雀「この御子を久しく見ぬかな。如何生ひなりにたらむ。かの人と著き竝びたらむには、世に似けなうは見えざりしを」御いらへ、仁壽殿「人はいかと見奉るらむ。まことなるにや。御髪も、御覽ぜしよりは長く、うちぎに多くあまり侍る。大方も見るかひなくは物し給はず」上、朱雀「さて二の御子は」女御、朱雀「上に似たまひて、それもことに劣り給はず、ふくらかに氣近きこと添ひてなむ」上、朱雀「なほ所がらにや。女子生し立てらるゝ所なれば、この御子たちも、外には似ずかし。さらば平かにてを。思ふ様にて、御子をあまた平かにて持給へる肖物は、其處にも怪しうはあらじかし」と宣へばまかで給ひぬ。

(一〇)

〔語釋〕

(一) 仲忠

(二) 女一を

(五) 「えうし」にて盛きを

かけたる如くの意なるべし「やうし」とかける本もあり

(八) 俊蔭女

(九) 「は」衍なるべし

〔考異〕

(三) 給ひて―給ふに

目女一宮大宮を産む。仲忠母子琴を弾く。産湯。

(四) うしろめたがり―うしろめたげに

(六) 如して―如くて

(七) 奉りつ―奉る

かくて中納言殿の出で給ひたる間に、女御の君中の大殿にわたり給ひて見奉り

給ひて、仁壽殿「いたくぞ面瘦せ給ひにける。上の然ばかりうしろめたがり聞え給ふ

ものを」とて見奉り給ふに、おもしろく盛なる櫻の朝露に濡れあえたる色あひ

にて、御髪はようしかけたる如して隙なくゆりかよりて、玉ひかる様に見え給ふ。

御衣は、赤らかなる唐綾のうちきの御衣、一かさね奉りて、御脇息におしかよ

りておはす。斯くて産屋の設、白き綾、御調度ども、銀にしかへして、殿にま

うけ給ふ。

二月ばかりかねて、うまれ給はむ日まで、不斷の修法萬の神佛にいのり申させ給

ふほどに、十月になりて、中の十日ばかりに、宮氣色ありて悩み給ふ。御座所、

東宮の宮たちの産れ給ひし所を、あるべき様にしつらはれて、わたし奉りつ。

内侍のかんのおとど、御車五つばかりして参り給へり。中納言はおろし奉りて、

宮のおはします御帳の内へ入れ奉り給ふ。大宮もわたり給へり。それは御局し